

全学FD2014
“北の情熱改革人” 小田隆治と語ろう

報告書

実施期日：2014 年 10 月 29 日(水)

開催場所：共通教育棟（主会場C11）

富山大学大学教育支援センター

はじめに

本書は、平成26年10月29日(水)午後に開催された、富山大学全学FD研修会『全学FD2014』の概要報告書です。

本学では、平成22年に大学教育支援センターを設置したことを契機に、従来、各部局で展開されてきたFD活動の発展に寄与することを目的として、全学FDタスクチームを中心にして、平成24年以降、毎秋「全学FD研修会」を開催し、今回が3回目にあたります。タスクチーム内に設けた全学FD推進ワーキンググループで、部局のFDにはない特徴ある内容となるよう中身を練り、鋭意、準備を進めるとともに、学生を含めた幅広い参加を求めて今年度も開催しました。

基調講演者としては、本学と同様な日本海側の総合大学の山形大学で、長年、全学FDの中心的役割を果たし、自らも学生の主体的な学びを実践的に追究し続けてこられた小田隆治氏を御招きし、山形大学の多様なFD実践の一端を話題提供して頂きました。その後、小グループに分かれたグループ討議がなされましたが、小田先生にはグループ討議にも加わって頂き、その後の全体討議でも熱弁を振るわれました。さらに、後日寄せられた質問にも丁寧に回答して頂いたと伺っています。深く御礼申し上げます。

中教審答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～』（平成24年8月）で強調された「学修の質保証」と「学修の継続性」の実現のための「大学教育の質的転換」は、その重要性は理解できるものの、日々の教育実践の中で、それをどう実現していくかに苦勞しておられる教員が少なくありません。また、その実現のために職員として何をなすべきかを模索しつつなかなか前進できない人も少なからずおられます。そういう教職員が一堂に会し、大学教育の在り方に関心を寄せる学生も含めて、学部を越えて積極的にフランクに意見交換するこの全学FDが大きな意義を持つことは間違いありません。本報告書に採録したグループワークシートを御覧になると、当日の熱気あふれる議論の様子が垣間見られると思います。当日御参加頂けなかった方、あるいは時間の都合で基調講演のみに参加された方にも雰囲気少しでも伝われば幸いです。

今後、このような「全学FD研修会」での成果が全学に浸透し、教育改善に繋がる事を願っています。

最後になりましたが、今回の企画を準備されたFDタスクチーム、特に全学FD推進ワーキンググループとして御尽力頂いた委員各位並びに学務課の職員各位、また積極的に御参加いただいた教職員、学生の皆さんにも厚くお礼申し上げます。

富山大学 理事・副学長
大学教育支援センター長

平井 美朗

“北の情熱改革人” 小田隆治と語ろう

全学FD2014

プログラム

10月29日(水) 13:30～16:40

五福 共通教育棟 C11教室ほか

13:30～13:35 開会の挨拶…平井センター長

13:35～14:35 基調講演 小田隆治氏

現在、山形大学地域教育文化学部教授 教育開発連携支援センターFD支援部門長
講演タイトル：自由・公開・共有を柱とした学生主体型授業とFD

【講演要旨】

私は2000年から山形大学のFD活動に関わってきました。2000年にはいわゆる「学生による授業評価」を学内に導入しました。「学生による授業評価」の結果を一覧表にまとめ、学生掲示板で公開しました。この方式は現在、東日本の大学間連携組織「FDネットワーク “つばさ”」の加盟校にも広がっています。我々は既存の授業の改善だけでなく、新規の授業法にも挑戦してきました。それが学生主体型授業です。しかし、学生主体型授業の型を他大学に押し付けようとは思っていません。しかし、それぞれの教員が伝統的な授業法に固執することなく、自分の授業法にチャレンジして欲しいとは考えています。このような山形大学のFDの取組を具体的にお話します。

14:35～14:45 移動（小休憩を兼ねる）

14:45～15:30 グループ討議（約45分）

事前申し込みがない当日参加の方は適宜振り分けます。

基調講演者の小田先生もグループ討議に加わられます。

15:30～15:40 移動（小休憩を兼ねる）

15:40～16:30 全体討議

16:30～16:35 閉会の挨拶：佐藤副センター長

16:35～16:40 アンケート記入

参加者名簿

●…グループ討議のファシリテーター

教員

No.	職名	氏名（ふりがな）	基調 講演	討議	懇談
1	理事・副学長	平井 美朗（ひらい よしろう）	○	×	○
2	人文学部教授	佐藤 裕（さとう ゆたか）	○	○	○
3	人文学部教授	末岡 宏（すえおか ひろし）	○	×	×
4	人文学部教授	大工原 ちなみ（だいくはら ちなみ）	○	×	×
5	人文学部教授	恒川 正巳（つねかわ まさみ）●	○	○	×
6	人文学部准教授	入江 幸二（いりえ こうじ）	○	×	×
7	人文学部准教授	上保 敏（じょうほ さとし）●	○	○	○
8	人間発達科学部准教授	久保田 真功（くぼた まこと）●	○	○	×
9	人間発達科学部准教授	林 衛（はやし まもる）	○	○	×
10	経済学部教授	志津田 一彦（しづた かずひこ）	○	×	×
11	経済学部教授	高田 寛（たかだ ひろし）●	○	○	×
12	経済学部准教授	大坂 洋（おおさか ひろし）	○	○	×
13	理工学研究部（理学）教授	田中 大祐（たなか だいすけ）	○	○	×
14	理工学研究部（理学）教授	柘植 清志（つげ きよし）	○	○	×
15	理工学研究部（理学）教授	永井 節夫（ながい せつお）	○	×	×
16	理工学研究部（理学）教授	渡邊 了（わたなべ とおる）	○	○	×
17	理工学研究部（工学）教授	黒澤 信幸（くろさわ のぶゆき）	○	×	×
18	理工学研究部（工学）教授	豊岡 尚樹（とよおか なおき）●	○	○	×
19	理工学研究部（工学）准教授	會田 哲夫（あいだ てつお）	○	×	×

No.	職名	氏名（ふりがな）	基調 講演	討議	懇談
2 0	医学薬学研究部（医学）教授	谷井 一郎（たにい いちろう）	○	×	×
2 1	医学薬学研究部（医学）准教授	坪田 恵子（つばた けいこ）	○	×	×
2 2	医学薬学研究部（医学）准教授	吉井 美穂（よしい みほ）	○	×	×
2 3	医学薬学研究部（医学）助教	野上 睦美（のがみ むつみ）	○	×	×
2 4	医学薬学研究部（医学）助教	山口 容子（やまぐち ようこ）	○	×	×
2 5	医学薬学研究部（薬学）教授	松谷 裕二（まつや ゆうじ）	○	×	×
2 6	芸術文化学部教授	長柄 毅一（ながえ たけかず）	○	○	×
2 7	芸術文化学部教授	野瀬 正照（のせ まさてる）	○	○	×
2 8	芸術文化学部教授	林 暁（はやし さとる）●	○	○	×
2 9	芸術文化学部准教授	沖 和宏（おき かずひろ）	○	○	×
3 0	芸術文化学部講師	平田 昌輝（ひらた まさき）	○	○	×
3 1	大学教育支援センター教授	橋本 勝（はしもと まさる）	○	○	○

職員

No.	職名	氏名（ふりがな）	基調 講演	討議	懇談
1	人文学部総務課係長	光地 浩和（こうち ひろかず）	○	×	×
2	人文学部総務課係長	本多 了（ほんだ さとる）	○	×	×
3	人文学部総務課事務職員	高木 真樹子（たかぎ まきこ）	○	×	×
4	人間発達科学部総務課係長	浦島 布美子（うらしま ふみこ）	○	×	×
5	人間発達科学部総務課主任	村上 まゆみ（むらかみ まゆみ）	○	×	×
6	人間発達科学部総務課事務補佐員	佐藤 末知子（さとう みちこ）	○	×	×
7	経済学部総務課係長	竹内 由利（たけうち ゆり）	○	×	×
8	経済学部総務課事務職員	竹垣 美里（たけがき みさと）	○	×	×
9	経済学部総務課事務職員	三田村 仁美（みたむら ひとみ）	○	×	×
10	理学部総務課主任	鳥海 衣美子（とりうみ えみこ）	○	○	×
11	理学部総務課事務職員	濱田 紫織（はまだ しおり）	○	○	×
12	理学部総務課事務補佐員	川辺 美夕紀（かわべ みゆき）	○	×	×
13	工学部総務課係長	織田 世起（おだ せいき）	○	×	×
14	工学部総務課事務職員	松原 宗士（まつばら しゅうじ）	○	○	×
15	工学部総務課技術専門職員	桐 昭弘（きり あきひろ）	○	○	×
16	医薬系学務課学部教務チーム係長	沼田 高志（ぬまた たかし）	○	×	×
17	医薬系学務課大学院教務チーム事務職員	山本 みゆき（やまもと みゆき）	○	×	×
18	医薬系学務課学生支援チーム主任	林 成剛（はやし せいごう）	○	×	×
19	医薬系学務課学生支援チーム事務職員	立浪 勢津子（たちなみ せつこ）	○	×	×
20	芸術文化学部総務課課長補佐	森田 智（もりた さとし）	○	○	×

No.	職名	氏名（ふりがな）	基調 講演	討議	懇談
2 1	芸術文化学部総務課係長	金森 美枝子（かなもり みえこ）	○	×	×
2 2	学務部長	清水 博人（しみず ひろと）	○	×	×
2 3	学務部参事	新出 信幸（しんで のぶゆき）	○	×	×
2 4	学務部付	村田 美憲（むらたみのり）	○	×	×
2 5	学務部学務課長	大野 昭彦（おおの あきひこ）	○	×	○
2 6	学務部学務課課長補佐	出村 昭宏（でむら あきひろ）	○	×	×
2 7	学務部学務課課長補佐	波間 雄司（はま ゆうじ）	○	×	×
2 8	学務部学務課学務企画チーム係長	寺島 裕一（てらじま ゆういち）	○	×	×
2 9	学務部学務課学務企画チーム主任	横山 雅彦（よこやま まさひこ）	○	○	○
3 0	学務部学務課学務企画チーム事務職員	塩沢 直也（しおざわ なおや）	○	○	○
3 1	学務部学務課学務企画チーム事務補佐員	中田 麻里奈（なかだ まりな）	○	×	×
3 2	学務部学務課学務企画チーム事務補佐員	山崎 希（やまざき のぞみ）	○	×	×
3 3	学務部学務課修学支援チーム事務補佐員	堀 奈緒子（ほり なおこ）	○	×	×
3 4	学務部学生支援課長	寺林 忠男（てらばやし ただお）	○	×	×
3 5	学務部学生支援課学生支援チーム係長	城村 浩司（じょうむら ひろし）	○	×	×
3 6	学務部学生支援課学生支援チーム主任	大町 雄介（おおまち ゆうすけ）	○	×	×
3 7	学務部学生支援課学生支援チーム事務職員	戸田 麻里江（とだ まりえ）	○	×	×
3 8	学務部入試課長	伊藤 文雄（いとう ふみお）	○	×	×
3 9	学務部入試課課長補佐	永田 義則（ながた よしのり）	○	×	×
4 0	学務部入試課係長	高木 晃（たかぎ あきら）	○	×	×
4 1	学務部入試課主任	清野 健生（せいの たけお）	○	×	×

No.	職名	氏名（ふりがな）	基調 講演	討議	懇談
4 2	学務部就職支援課課長補佐	武田 正夫（たけだ まさお）	○	×	×

学生

No.	所属	氏名（ふりがな）	基調 講演	討議	懇談
1	人間発達科学部4年	井上 裕也（いのうえ ゆうや）	○	○	×
2	人間発達科学部4年	加賀見 尚子（かがみ なおこ）	○	○	×
3	人間発達科学部3年	久保 卓也（くぼ たくや）	○	○	×
4	理学部2年	軽尾 浩晃（かるお ひろあき）	○	○	×

教員 31名（内訳：基調講演のみ出席 14名、基調講演・グループ討議参加 17名）

職員 42名（内訳：基調講演のみ出席 35名、基調講演・グループ討議参加 7名）

学生 4名（内訳：基調講演のみ出席 0名、基調講演・グループ討議参加 4名）

計 77名（内訳：基調講演のみ出席 49名、基調講演・グループ討議参加 28名）

基調講演

自由・公開・共有を柱とした 学生主体型授業とFD

山形大学地域教育文化学部教授、教育開発連携支援センターFD支援部門長

小田隆治氏

- ・ 理学博士
- ・ 山形大学理学部卒、筑波大学大学院博士課程生物科学研究科修了
- ・ 北里大学医学部助手、山形大学教養部助教授を経て現職。
- ・ 大学間連携組織「FDネットワーク つばさ」の運営協議会委員長



自由・公開・共有を柱とした 学生主体型授業とFD

2014年10月29日

山形大学地域教育文化学部 副学部長
FDネットワーク“つばさ”協議会 議長
小田隆治

大学は何に挑戦しているのか？

大学は何に挑戦しているのか？

生涯を通じた
主体的な学びの基盤作り。

■大学は学問を教えるところである。

- 教養教育を通して、知的な市民となった。
- 演習・実験・実習を通して、学問の方法を体得していった。
- 卒業研究を通して、学問の真理の探究と課題解決能力を身に付けていった。

■大学の大衆化や文明の成熟、少子化による学生の質の転換

■高度情報化やグローバル化、人口減少による社会の混沌

■若者たちよ、この混沌とした時代を逞しく生き、良い社会を築いていこうじゃないか。

■若者たちよ、この混沌とした時代を逞しく生き、良い社会を築いていこうじゃないか。

ただのメッセージではなくて、その能力を引き出し、高めていくことが大学に求められている。

**予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ
(審議まとめ)**

平成24年3月26日
中央教育審議会大学分科会
大学教育部会

**新たな未来を築くための
大学教育の質的転換に向けて
～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～
(答 申)**

平成24年8月28日
中央教育審議会

○急激に社会が変化する中での大学教育改革（日本だけでなく世界的な問題）

○成熟社会における若者たちの意欲の減退

進学率が50%を超えてユニバーサル化した日本の大学において、すべての学生が強い学習意欲を持っている、と考えるのは幻想である。

高等教育のパラダイム転換

■teachingからlearningへ

■教員が何を教えたかではなく、学生が何を身に付けたかである。

学生の主体性の育成

- カリキュラム
- 個々の授業
- 課外活動

主体的な学習の意味するところ

- 生涯学習
(専門家として、市民として)

山形大学のFD活動

- 山形大学は6学部からなり、地域分散型である。
- 学部を問わず、一年間、学生は山形市の小白川キャンパスで基盤(教養)教育を履修する。
- 山形大学の全学共通教育である基盤教育の実践的な活動報告を中心とする。

全学共通教育としての 基盤教育のFD

担当部局

- 教育開発連携支援センター
(旧・高等教育研究企画センター)
- 基盤教育評価改善会議

山形大学のFDの理念

相互研鑽

山形大学の多彩なFD活動

- 学生による授業評価アンケート
- 公開授業&検討会
- ワークショップ
- FD合宿セミナー
- 学生主体型授業の研究と実践
- 授業改善ハンドブック
- FD先進大学調査
- 授業改善報告書
- Web FD

山形大学の主なFD事業の開設年度

- 1999年
 - ・FDワークショップ
- 2000年
 - ・学生による授業評価
 - ・公開授業と検討会
- 2001年
 - ・FD合宿セミナー
 - ・学生主体型授業の研究
- 2004年
 - ・地域ネットワークFD“樹氷”（現代GP）
- 2006年
 - ・エリアキャンパスもがみ（現代GP）
- 2007年度
 - ・個別支援型FDの開始（FD・授業支援クリニック部門の新設）
 - ・ベストティーチャー賞とベストティーチャー新人賞の創設
- 2008年
 - ・FDネットワーク“つばさ”
 - ・学生主体型授業開発共有化FDプロジェクト（教育GP）
- 2009年
 - ・授業改善ビデオ『あつとおどろく大学授業NG集』
- 2010年
 - ・英語版授業改善ビデオ『あつとおどろく大学授業NG集』
 - ・授業改善ビデオ『学生主体型授業へのアプローチ』

山形大学のFDは教育改善、
特に授業改善を目指している。

山形大学のFDの特徴

- 公開
- 共有
- 実践

「公開性と共有化」は山形大学の
FDの様々な事業に通底している。

- FDの理念：相互研鑽
- 学生による授業評価
- 公開授業と検討会
- FDワークショップ
- FD合宿セミナー
- 地域ネットワークFD“樹氷”
- FDネットワーク“つばさ”

既存の授業の改善

- 授業の診断書
 - ・ 学生による授業改善アンケート
- 授業改善のための処方箋
 - ・ 自助努力
 - ・ 公開授業&検討会
 - ・ 授業改善ハンドブック
- 授業改善の点検評価
 - ・ 学生による授業改善アンケート

**「学生による授業評価」は、
あくまで教育改善に利用する。**

「学生による授業評価」は、

実施すること以上に

アンケート結果の集計方法と

その公表方法

が重要である。

「学生による授業評価」は、

実施すること以上に

アンケート結果の集計方法と

その公表方法

が重要である。

「学生による授業評価」は、

実施すること以上に

アンケート結果の集計方法と

その公表方法

が重要である。

- 個の取組と組織的な取組の併用。
- 組織の中での自分の位置付け。

- 個の取組と組織的な取組の併用。
- 組織の中での自分の位置付け。

[illegible][illegible]

教育情報の 透明化と共有化

平成16年度文科省現代GP採択事業

**山形県内6大学・短大
大学間連携組織**

「地域ネットワークFD“樹氷”」

平成16年度文科省現代GP採択事業

**山形県内6大学・短大
大学間連携組織**

「地域ネットワークFD“樹氷”」

平成16年度文科省現代GP採択事業

**山形県内6大学・短大
大学間連携組織**

「地域ネットワークFD“樹氷”」

実際に、授業をどのようにして改善するか？

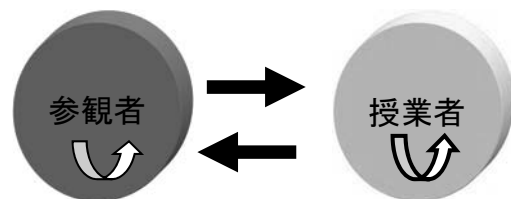
- 自助努力
- ピアレビュー
(公開授業&検討会)

◆ 公開授業と検討会はセットである。



公開授業と検討会において、
授業者をさらし者にしては
いけない。

「公開授業&検討会」は「授業者&参観者」
双方の授業改善を目的とする



◆ 公開授業&検討会の視点



■ FD合宿セミナー

平成20年
東日本広域（北海道・東北・関東）

51校の大学間連携組織
「FDネットワーク“つばさ”」

FDの相互研鑽

山形大学のFDは既存の授業改善を目指している。

この目標は過去・現在・未来と変わらない。

一方で、
大学生の質の変化や社会からのニーズにより
社会人基礎力や人間力の育成を目的とした、

- 初年次教育
- キャリア教育
- PBL
- チュートリアル教育
- アクティブ・ラーニング

等々の新規授業の開設が迫られている。

平成20年度 教育GP採択事業

『学生主体型授業開発共有化FDプロジェクト』

FDの新段階という位置付け

『学生主体型授業開発共有化FDプロジェクト』

第一期（平成20年度）
新規授業の調査研究

第二期（平成21年度）
パイロット授業の実施（開発・共有化）

第三期（平成22年度）
60コマの教養セミナーの実施（共有・改善）

■授業開発のためのFD教室の設置

『先端学習ラボ』

ビデオ教材『学生主体型授業へのアプローチ』

■多様な学生主体型授業



■学生主体型授業

学生が主体的に考え、行動できることを目的とした授業。

■学生主体型授業

- 学生参加型授業
- 学生参画型授業
- グループ学習
- 双方向性授業
- 2つのPBL

■学生主体型授業

- 型にはまらない授業。
- 専門性、教員の能力・経験・個性に
応じた授業。
- 授業は実験である。

■学生主体型授業は教員主体型授業でもある。

- あなたは何をやりたいのか？
- あなたがやりたいことをやればよい。
- その際、やりたいことの目標や内容、評価を明らかにすること。
- これで学生の主体性と能力を伸ばせると自信を持つこと。
- あなたは楽しみながら、苦悩しながら授業をしていけばいい。

■学生主体型授業

- レポートの作成やディベートなどは2度以上やって、改善をする。
- 学生には達成感が重要である。

■学生主体型授業の次なる課題

- 予期せぬ事態や理不尽さに対応する。
- 予期せぬことを予期して仕込むことはどこかに嘘がある。(型からの脱却)
- ストレス耐性を身に付ける。
- パーツだけのトレーニングではなく、総合的な試合を楽しまなければ、続けてはいけない。
- 人間はある事象を多様に解釈し、それを自分のものとしていく。

『エリアキャンパス未来遺産創造プロジェクト

—大学の初年次教育と地域の人材育成を相乗的に活性化していく現地体験型授業—

平成18年度文部科学省現代GP
「地域活性化への貢献（広域圏型）」
に採択される。

エリアキャンパスもがみ 現地体験宿泊型授業

『フィールドワーク：共生の森もがみ』
平成18年度から開講

◆教養教育の正規の授業（自由選択制） 授業担当者は副学長

◆平成21年度
前期14, 後期10,
合計24の授業プログラム

◆各プログラムは学生定員10名
(実際は、最大17名、最小6名のプログラムとなった。一つのプログラムは希望者がいなかったため開講されなかった)

平成21年度前期プログラム

1	新庄市	日本一の山車パレード・新庄まつりー本物の山車作りに挑戦」
2	〃	作陶に挑戦！ー新庄東山焼の世界
3	〃	環境保全活動を通じた自然との共生や循環型社会
4	金山町	目覚めよ！ 谷口銀山
5	〃	山間地の宝物を見つけよう
6	最上町	冒険家との語らいと特産品づくり体験'09
7	舟形町	自然と農村が共生する文化を活用した地域再生活動
8	真室川町	山村活性化調査隊～体験して、ふれあって、小又の未来図をつくろう～
9	〃	子ども達の自然体験等支援講座Ⅰ
10	大蔵村	温泉地大蔵村の自然・人・もの体験
11	鮭川村	郷土料理と里山自然体験
12	戸沢村	戸沢村の超元氣印！ 幸齢者集団の生き様に学ぶ
13	〃	田んぼの学校とビオトープ編
14	〃	焼畑農法と自然エネルギー編

平成21年度後期プログラム

1	新庄市	「民話のふるさと新庄」～その原風景を探访する～
2	〃	体験「ごまかしのない食品づくりに挑戦！」
3	金山町	山間地の文化を考えよう
4	最上町	交流 地域の活力に触れよう '09
5	真室川町	子ども達の自然体験等支援講座2
6	鮭川村	古代ロマンと伝統生活体験
7	戸沢村	郷土料理と里山づくり編
8	〃	文化伝承と里山生活編
9	〃	冬の里山とまたぎ文化編
10	〃	地域の生活文化と冬の自然体験

特色

- 宿泊型の現地体験型学習
- 少人数教育
- 現地の講師
- 寄付授業
- 地元の子供の参加

授業の流れ

1. オリエンテーション（大学）
 - ・ 現地講師による説明会
 - ・ 希望調査（作文）と決定
2. 事前指導（大学）
3. 現地体験（エリアキャンパス）
 - ・ 1泊2日（土・日曜日）を2回
 - ・ LMS（学習支援システム）による記録等の提出
4. 合同発表会（大学）
 - ・ 発表会の事前指導

授業改善のために取ってきた方策

1. 学生の履修動機の明確化
 - 「なぜこのプログラムを選択したか」の作文と、それに基づく受講選抜
2. 学生の主体性の確保
 - 事前指導の内容の充実（・ワークショップ化・グループ内の役割の決定）
 - 地域に対する事前学習
3. 学生サポーターの指導
 - 学生サポーターに対する事前指導
 - オリエンテーション参加の義務付け
4. 現地講師のFD
 - 2008年度より導入、毎年1回実施
 - 90分間の研修
5. 学生サポーターによるオリエンテーションやプログラムの具体的見直し
 - オリエンテーション（・良かった点・改善点）
 - プログラム（・良かった点）
6. 質の高い学生発表会に向けた指導
 - 教員と学生サポーターによる徹底した指導

学生による授業評価の結果

質 問 項 目	前期FW (教養全体)	後期FW (教養全体)
この授業を意欲的に受講しましたか。	4.80 (4.10)	4.53 (4.08)
教員に熱意は感じられましたか。	4.56 (4.28)	4.69 (4.36)
教員の一方的な授業ではなく、コミュニケーションはとれていましたか。	4.59 (4.01)	4.67 (4.12)
授業はよく準備されていましたか。	4.54 (4.22)	4.42 (4.30)
考え方、能力、知識、技術などの向上に得るところがありましたか。	4.66 (4.08)	4.44 (4.12)
この授業を総合的に判断すると良い授業だと思いますか。	4.80 (4.22)	4.81 (4.28)

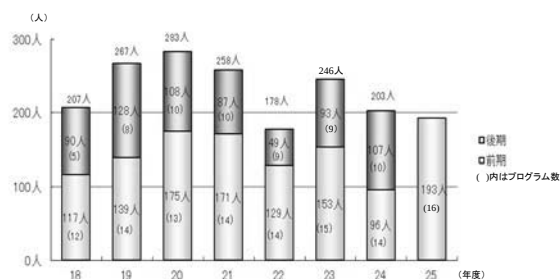
もがみ活動レポート

「私はもがみで考えた！」(一部抜粋)

○これらの体験によって、大学の講義を聴く時、何をするために勉強をするのか、この授業から学んだものを実際にどう使うかなど、具体的に考えるようになりました。今まで何のために勉強しているのか漠然としていた目的が、フィールドワークを通して、より具体的になった点が、とてもよかったと思いました。

(医学部学生)

フィールドワーク履修者数の推移



全国規模への拡大発展

文部科学省 平成24年度「大学間連携共同教育推進事業」

東日本広域圏の大学間連携による 教育の質保証・向上システムの構築

連携校(19校)

山形大学、会津大学、札幌大学、北翔大学、青森中央学院大学、石巻専修大学、東北芸術工科大学、東日本国際大学、明海大学、国際武道大学、了徳寺大学、東京家政学院大学、東京造形大学、日本女子大学、札幌大学女子短期大学部、北翔大学女子短期大学部、青森中央短期大学、羽陽学園短期大学、いわき短期大学

連携機関(14機関)

北海道教育委員会、釧路市、平取町、NPO法人阿寒観光協会まちづくり推進機構、新庄市、金山町、最上町、舟形町、真室川町、大蔵村、鮭川村、戸沢村、川崎市、相模原市

大地連携ワークショップ

■山形県エリアキャンパスもがみ(山形大学)

■北海道釧路市阿寒町(札幌大学・北翔大学)

■北海道平取町(札幌大学・北翔大学)

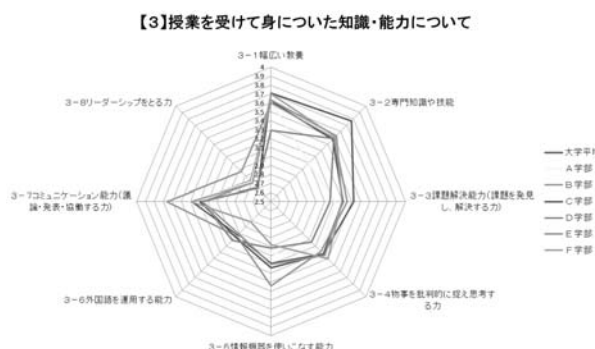
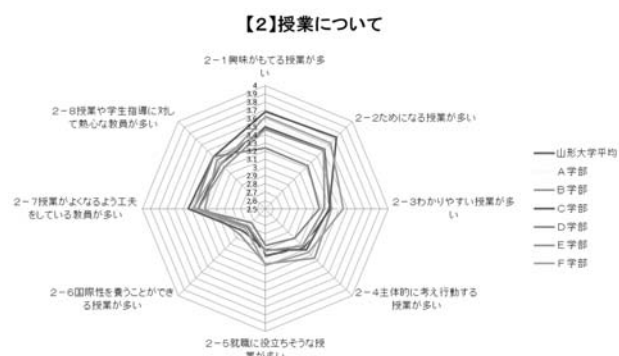
■山形県エリアキャンパス(山形大学)

■神奈川県川崎市(日本女子大学)

■神奈川県相模原市(東京家政学院大学)

■米国ニューヨーク州(山形大学)

■ IR

[illegible]

大学は、組織として、個人として教育改善を果敢に進めて行かなければならない。

fin.

【基調講演要旨】（要約は人文学部 上保准教授）

基調講演では、大学をめぐる昨今の状況について解説があった後、山形大学で行われている FD の概要やいくつかの具体的な事例の紹介、また、それらに対する講演者の見解などが示された。

1. 山形大学の FD の特徴

山形大学の FD は、教育改善、特に授業改善を目指しており、その特徴は、公開、共有、実践であると言えることができる。

2. 学生による授業評価アンケート

学生による授業評価アンケートは、実施すること以上にアンケート結果の集計方法とその公開方法が重要である。そのため、その集計結果を全教員に公開し、組織の中での自分の位置付けを把握できるようにしている。

3. 公開授業と検討会

授業改善のためには、自助努力とピアレビューが必要である。山形大学では、授業者と参観者の双方の授業改善を目的として、公開授業と検討会を実施している。

4. FD の大学間連携

FD の相互研鑽を目的に、平成 20 年度に東日本広域(北海道・東北・関東)の 51 校の大学間連帯組織「FD ネットワーク “つばさ”」を組織している。

5. 学生主体型の授業

学生主体型授業は、学生が主体的に考え、行動できることを目的とした授業である。また、学生主体型授業は教員主体型授業であるので、教員が型にはまらない授業、専門性、教員の能力・経験・個性に応じた授業を実践すべきである。

6. 地域との連携

エリアキャンパスもがみ現地体験宿泊型授業を、平成 18 年度より教養養育の正規の授業として実施している。各市町村から出されたプログラムに基づいて事業を設計して実施し、地域社会との連携を深めている。学生の評価もたいへん高い。また、大学間連携の事業を立ち上げ、こうした事業を全国規模に拡大発展をしている。



グループ分け一覧

できるだけ学部や職位が分散するよう組み合わせていただきました。この機会を通じて他学部の方と交流し、同じ富山大学の仲間として問題を共有したり相互理解を深めたりしてください。

なお、申し込み段階で「基調講演のみ」と申し出られている方は、下記の名簿には名前はありません。予定が変わってグループ討議に参加なさりたい方は、基調講演が終わるまでに受付で申し出てください。

●印は各グループのファシリテーターです。全学FDタスクチームの構成員にお願いしています。

A (E 2 1 教室)

山形大	教授	小田 隆治
人発	3 年	久保 卓也
●経済	教授	高田 寛
理	主任	鳥海 衣美子
芸文	准教授	沖 和宏
芸文	課長補佐	森田 智

B (E 2 2 教室)

人文	教授	佐藤 裕
理	2 年	軽尾 浩晃
●工	教授	豊岡 尚樹
芸文	准教授	奥 敬一
学務	課長	伊藤 文雄

C (E 2 3 教室)

●人発	准教授	久保田 真功
理	事務職員	濱田 紫織
工	技術専門職員	桐 昭弘
芸文	教授	野瀬 正照
大セ	教授	橋本 勝

D (E 3 1 教室)

人発	4 年	加賀見 尚子
理	教授	田中 大祐
工	事務職員	松原 宗士
●芸文	教授	林 暁
芸文	講師	平田 昌輝

E (E 3 2 教室)

●人文	教授	恒川 正巳
経済	3 年	高橋 伸英
理	教授	柘植 清志
芸文	助教	ペルトネン 純子
学務	主任	横山 雅彦

F (E 3 3 教室)

●人文	准教授	上保 敏
人発	4 年	井上 裕也
理	教授	渡邊 了
芸文	教授	長柄 毅一
学務	事務職員	塩沢 直也

人発：人間発達科学部 芸文：芸術文化学部 大セ：大学教育支援センター

参考：グループ討議事前申込者数（及び全事前申込者数）

教員 17 名（ほかに基調講演のみ参加 14 名を加え 31 名）

職員 8 名（ほかに基調講演のみ参加 34 名を加え 42 名）

学生 5 名

計 30 名（ほかに基調講演のみ参加 48 名を加え 78 名）

ワークシート

書記(名前を記入して下さい。姓だけで結構です。):

久保、

いずれかに○をして下さい。

() 小田先生への質問・反論

(○) グループとしての主張

タイトル

概要を20文字以内で要約して下さい。

大学教育のめざすところ & ありがた

内容

見やすい文字で分かりやすくまとめて下さい。後で資料としてそのまま採録する可能性があります。
グループメンバーの主張を融合する形でも、誰かの主張をブラッシュアップする内容でも構いません。
図式的なものでもOKです。

The diagram is enclosed in a large rectangular box. It features several hand-drawn elements:

- Top Left:** A cloud-like shape containing the text "＜過去＞ 知の放出をして、ついでくるのが学生".
- Top Right:** A rectangular box with a decorative border containing the text "大学から輩出する人材の質・能力と 考えはいいと受けはいい".
- Center:** The text "teaching & learning" is written, with a hand-drawn arrow pointing towards it from the left.
- Bottom Left:** A cloud-like shape containing the text "＜いま＞ その時に、その学生が理解できるように！ 目の前の学生から、逃げないこと".
- Bottom Right:** A list of handwritten notes: "アンケート", "サポート体制", "学部間差", "教員経験", and "etc...".

※このワークシートはグループ討議終了後、速やかにC11前の担当者に提出して下さい。

すぐに全員にコピーを渡して共有する予定です。全体討議では、小田先生と意見交換するだけでなく、他グループの主張に対する疑問・反論なども自由に発言して下さい。

ワークシート

書記(名前を記入して下さい。姓だけで結構です。):

軽尾

いずれかに○をして下さい。

(○) 小田先生への質問・反論

() グループとしての主張

タイトル

概要を20文字以内で要約して下さい。

スキルが必要な分野(科目)でのアクティブラーニングへの展開

内容

見やすい文字で分かりやすくまとめて下さい。後で資料としてそのまま採録する可能性があります。

グループメンバーの主張を融合する形でも、誰かの主張をブラッシュアップする内容でも構いません。

図式的なものでもOKです。

ただグループディスカッションをするだけではスキルが習得できないのではないかと、
学生が教える側に立つ授業もアクティブラーニングの一つではないかと。
どのようにすれば、学生が教える側に立つ授業を効率良く行えるか。

※このワークシートはグループ討議終了後、速やかにC11前の担当者に提出して下さい。

すぐに全員にコピーを渡して共有する予定です。全体討議では、小田先生と意見交換するだけでなく、他グループの主張に対する疑問・反論なども自由に発言して下さい。

ワークシート

書記(名前を記入して下さい。姓だけで結構です。):

橋本

いずれかに○をして下さい。

(○) 小田先生への質問・反論

() グループとしての主張

タイトル

概要を20文字以内で要約して下さい。

体験型の授業と基礎との関係をどう結び

内容 (学びの質)

つける?

見やすい文字で分かりやすくまとめて下さい。後で資料としてそのまま採録する可能性があります。

グループメンバーの主張を融合する形でも、誰かの主張をブラッシュアップする内容でも構いません。

図式的なものでもOKです。

理系の具体的な授業実践

体験型の授業と基礎との関係

反転授業はうまくいくのか

予備校はうまい

公開授業のあり方 (見たい
ニーズとの合致)

インセンティブの問題

※このワークシートはグループ討議終了後、速やかにC11前の担当者に提出して下さい。

すぐに全員にコピーを渡して共有する予定です。全体討議では、小田先生と意見交換するだけでなく、他グループの主張に対する疑問・反論なども自由に発言して下さい。

ワークシート

書記(名前を記入して下さい。姓だけで結構です。):

平田

いずれかに○をして下さい。

() 小田先生への質問・反論 (○) グループとしての主張

タイトル

概要を20文字以内で要約して下さい。

言価アンケートの公開について アクティブラーニングの有用性と課題点

内容

見やすい文字で分かりやすくまとめて下さい。後で資料としてそのまま採録する可能性があります。
グループメンバーの主張を融合する形でも、誰かの主張をブラッシュアップする内容でも構いません。
図式的なものでもOKです。

授業の言価アンケートの公開 ... 条件付き肯定
「満足度」だけを評価軸とするのではなく、「満足度×難易度」「難易度×満足度」
の2つを加えた 3つを評価軸とすることで、見えてくるものがあるの
ではないか。

アクティブラーニング

学生主体の取り組みの有用性がある一方、教員がそこに関わって
学習成果を高めていくのか。
組織としてカリキュラムの重要性。

※このワークシートはグループ討議終了後、速やかにC11前の担当者に提出して下さい。

すぐに全員にコピーを渡して共有する予定です。全体討議では、小田先生と意見交換するだけでなく、他グループの主張に対する疑問・反論なども自由に発言して下さい。

ワークシート

書記(名前を記入して下さい。姓だけで結構です。):

恒川

いずれかに○をして下さい。

(○) 小田先生への質問・反論 () グループとしての主張

タイトル

概要を20文字以内で要約して下さい。

社会の変化と大学●教育のあり方

内容

見やすい文字で分かりやすくまとめて下さい。後で資料としてそのまま採録する可能性があります。
グループメンバーの主張を融合する形でも、誰かの主張をブラッシュアップする内容でも構いません。
図式的なものでもOKです。

現状に至る社会の変化をどうとらえ(成熟なのか?)、その関連で大学教育の現状をどうとらえるか(どんな段階にあるのか)、今後大学教育はどうあるべきか、などについてお考えをさらにお伺いできれば幸いです。

※このワークシートはグループ討議終了後、速やかにC11前の担当者に提出して下さい。

すぐに全員にコピーを渡して共有する予定です。全体討議では、小田先生と意見交換するだけでなく、他グループの主張に対する疑問・反論なども自由に発言して下さい。

ワークシート

書記(名前を記入して下さい。姓だけで結構です。):

塩沢

いずれかに○をして下さい。

(○) 小田先生への質問・反論 () グループとしての主張

タイトル

概要を20文字以内で要約して下さい。

基調講演に係る小田先生への質問

内容

見やすい文字で分かりやすくまとめて下さい。後で資料としてそのまま採録する可能性があります。
グループメンバーの主張を融合する形でも、誰かの主張をブラッシュアップする内容でも構いません。
図式的なものでもOKです。

- ・山形大学では数々の取組みが行われているが、どのような過程で実現したのか。また、数々の取組みによって、どのような効果があるのか。
- ・いわゆる普通の授業で応用できるような具体的な内容や技術があれば御教示願う。
- ・「やさぐれ」の話で、どうしてやさぐれていたか。

※このワークシートはグループ討議終了後、速やかにC11前の担当者に提出して下さい。

すぐに全員にコピーを渡して共有する予定です。全体討議では、小田先生と意見交換するだけではなく、他グループの主張に対する疑問・反論なども自由に発言して下さい。



↑ A グループ討議



↑ B グループ討議



↑ C グループ討議



↑ D グループ討議



↑ E グループ討議



↑ F グループ討議

【グループ討議の感想】

基調講演の後にファシリテーターという立場でグループ討議に参加した。

富山大学各学部から集まった教員3名と事務職員1名、学生1名を交えての話し合いであった。最初は初顔合わせという事で少し硬い空気が流れた。しかし、自己紹介後にそれぞれテーマに沿った意見を交換し、普段はあまり経験しない全学FDの企画の中で、他学部の教員や事務官がどのような思いで教育に携わっているかを直接聞くことが出来、参加者にとっては有意義であったと思う。

この全学FDに参加する教員がもう少し多くなると、こうした議論も活発になるだろうが、FDを職務として位置付けないとどうしても大きな潮流にはならないと感じる。

(Dグループ ファシリテーター 林 暁)

先生方、職員の方とお話する機会は少なくないと思っている私だが、それでも今回の全学FDでは、学生とは異なる立場の、今まで知らなかった考えにたくさん出逢うことができた。教員・職員・学生・周囲の人々。もし、皆にとって、富山大学が「よりよい場所・意義のある場所・過ごしやすい場所」となることに価値を認めるのであれば、皆の「考え・思い」を共有することのできる機会は、欠くことのできないものだと思う。このような場に来ると、いつも私はそう感じさせられる。また、ここは、一学生として、先生方、職員の方、そして学生に対して、1人でも多く、大学を価値ある場所へと高めるための、独りよがりでない当事者意識を感じてほしいという切なる想いの実現を願う場でもある。

(Aグループ 参加学生 人間発達科学部3年 久保卓也)

私が参加したグループでは、初めは硬い空気でアイスブレイクにやや時間を要した。しかし、その後は基調講演に関連した話し合いが続くようになった。ただし、軸に沿って討議するというよりは連想的に話し合われた印象であった。よって、最後にワークシートにまとめる際に一つのタイトルに収まるような状態ではなく、幾つか挙がった基調講演に対する質問をそのまま記載することとなった。「討議」ということで、最終的に何らかの結論や決議が導かれなければならなかったかもしれない。反面、初対面かつ短時間という条件でそのようにすることは難しく、まとめることが意識されなかったことで、異なる立場・視点で異なる関心事について自由に述べられ、普段は知りえない考えに触れられたと思う。

(Fグループ 学務部学務課学務企画チーム事務職員 塩沢直也)



【全体討議】（要約は大学教育支援センター 橋本教授）

各グループでの議論の後、再度、全体が集まり、他のグループでの議論を共有するとともに小田先生を含めて全体で討議する場を設定した。基調講演だけで帰られた参加者がいた関係で、基調講演時に比べるとやや人数が寂しかったが、活発に意見交換がなされた。各グループの討議の様子を適宜、参観されていた平井センター長も全体討議に加わられた。

小田先生への質問ではまず「学部の専門性や科目の性格によってアクティブラーニングがやりやすいものとそうでないものがあるのではないか」「体験型の学びと基礎力の育成の関係をどう結びつけるか」というような問いかけがあったが、これに対し小田先生は「確かにその点は重要だが、より重要なのは全体として学生が主体的な学びをするような雰囲気とその大学に醸成されるかどうかだ」と回答された。また、「山形大学での数々の取組を通じてどのような成果が出てきているか」という問いかけもあったが、「特に教育連携において県内外の高等教育機関や自治体等との結びつきが強まったことを実感しており、山形大学に寄せられる期待の大きさを感じている。また、学内の教職員の教育に対する接し方も年々進化している。」という回答があった。さらに、「変わりつつある現代社会において大学教育はどうあるべきか」という根源的な問いも寄せられたが、これに対しては小田先生は「社会のニーズに応える姿勢も大切で、特に教育機関という意識は構成員全体がしっかり持つべきだが、いたずらにニーズばかりを追いかけて、大学の本来あるべき姿を見失ってはならない」とくぎを刺された。

全体での意見交換という点では、特に山形大学が何年も前から実施している「授業評価アンケートの結果公開」の有効性について議論がなされた。「数値だけが独り歩きしないよう慎重な吟味が必要」とか「数値に現れないその授業の長所・短所を見定めるべきだ」「公開するなら利用のしやすさにも考慮すべきではないか」というような意見の他、参加していた学生からは「履修済みの科目の数値はあまり関心がない。むしろ、履修前にシラバス等で確認できる方が良いし、できれば授業評価アンケートでその授業がどう変わったのかが分かればなおよい」という意見なども出た。

平井センター長からは、関連して、教育内容の質の担保という観点から、GPA制とCAP制の導入を現在進めているというアナウンスもあった。



本日は、全学FD2014にご参加いただき、ありがとうございました。今後の企画の参考にさせていただくため、アンケートにご協力をお願いします。(当てはまる番号に○を付けてください。)

問1 今回の企画の各パート及び全体について評価をしてください。

	良 く な か つ た	あ ま り 良 く な か つ た	ど ち ら と も い え な い	お お む ね 良 か つ た	良 か つ た
1) 基調講演	1	2	3	4	5
2) グループ討議	1	2	3	4	5
3) 全体討議	1	2	3	4	5
4) 企画全体として	1	2	3	4	5

問2 (1) グループ討議は今回教員・職員・学生が混成のグループとしましたが、今後どうすべきだと思いますか。

- 1) このままでよい 2) 教員・職員・学生別にするべきである
3) その他 ()

(2) (1) の回答について、理由・意見があれば記入してください。

問3 開催時期について、どう思いますか。

- 1) 今のまま(10月下旬)でよい 2) 変えたほうがよい(時期:)

問4 今後、より多くの教員・職員・学生に全学FD研修に参加していただくために、良い考えがあれば記入してください。

ご協力ありがとうございました。最後にあなたの立場とご所属をお教えてください。

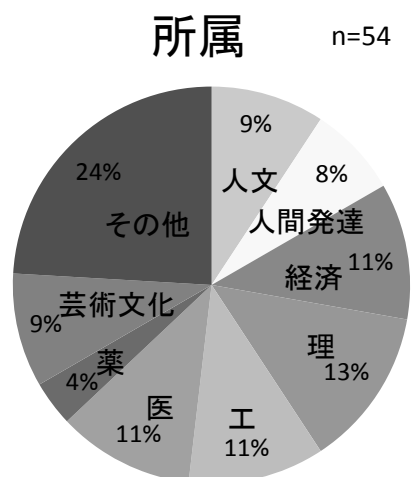
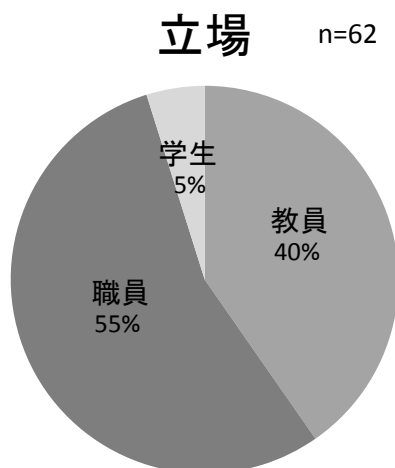
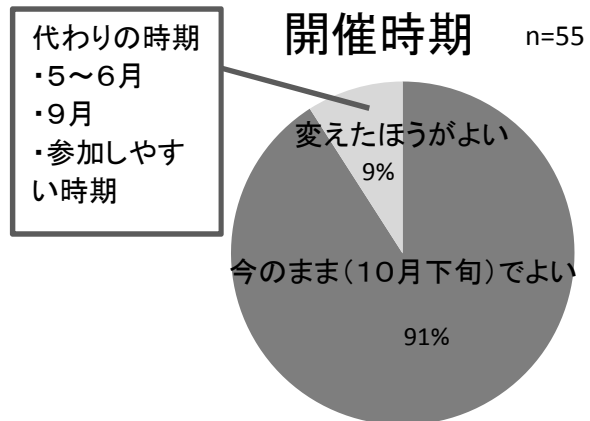
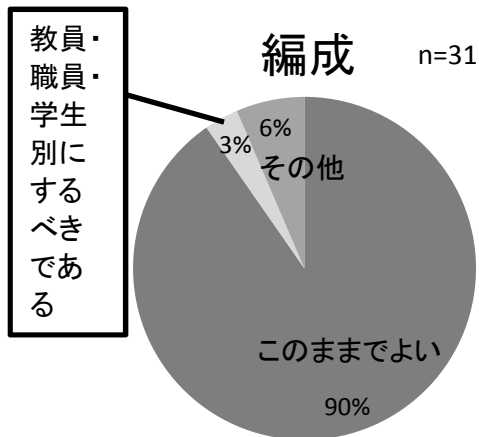
- 1) 教員 2) 職員 3) 学生

- 1) 人文 2) 人間発達 3) 経済 4) 理 5) 工 6) 医 7) 薬 8) 芸術文化
9) その他 ()

全学FD2014アンケート集計

基調講演		選択番号 (記入数字)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	回答 数計
番号	意味	基調講演	2	0	4	26	31								63
1	良くなかった	グループ討議	3%	0%	6%	41%	49%								-
2	あまり良くなかった	グループ討議	0	0	2	13	7								22
3	どちらともいえない	グループ討議	0%	0%	9%	59%	32%								-
4	おおむね良かった	全体討議	0	1	3	12	5								21
5	良かった	全体討議	0%	5%	14%	57%	24%								-
全体討議		企画全体	0	0	3	12	6								21
番号	意味	企画全体	0%	0%	14%	57%	29%								-
1	良くなかった	編成	28	1	2										31
2	あまり良くなかった	編成	90%	3%	6%										-
3	どちらともいえない	開催時期	50	5											55
4	おおむね良かった	開催時期	91%	9%											-
5	良かった	開催時期	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
編成		変更時期「月」	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	100%	0%	0%	0%	-
番号	意味	変更時期「週」	0	0	0	0									0
1	このままでよい	変更時期「曜」	-	-	-	-									-
2	教員・職員・学生別にするべきである	変更時期「曜」	0	0	0	0	0	0	0						0
3	その他	立場	-	-	-	-	-	-	-						-
開催時期		立場	25	34	3										62
番号	意味	所属	40%	55%	5%										-
1	今のまま（10月下旬）でよい	所属	5	4	6	7	6	6	2	5	13				54
2	変えたほうがよい	所属	9%	7%	11%	13%	11%	11%	4%	9%	24%				-
変更時期「曜」															
番号	意味														
1	日														
2	月														
3	火														
4	水														
5	木														
6	金														
7	土														
立場															
番号	意味														
1	教員														
2	職員														
3	学生														
所属															
番号	意味														
1	人文														
2	人間発達														
3	経済														
4	理														
5	工														
6	医														
7	薬														
8	芸術文化														
9	その他														

全学FD2014アンケート集計



◎問2(2)「(1)『グループ討議は今回教員・職員・学生が混成のグループとしましたが、今後どうするべきだと思いますか。』の回答について、理由・意見があれば記入してください。」の回答

○(1)で「1)このままでよい」と回答した人の回答

- ・教員・職員・学生の3者が交わるのは良いと思うが、全体的に教員目線での討議であったと思う。←普段とは違う視点で「授業」を考えることができ良かったと思うが、少々難しかった。
- ・学生の意見が聞ける方がよいと感じた。
- ・他学部の学生の意見を聞く機会がないので、おもしろかった。
- ・アイスブレイクの意味を考えた方がよい。自己紹介の意味以外の効果をファシリテーターに伝えたら、やりやすくなると思う。
- ・教員として学生の意見はいつでも必要
- ・とくに問題がなかった。
- ・様々な立場・視点からの意見を聞くことができ、有意義な時間だった
- ・学生はやりづらいかもしれませんが、教員にとっては貴重な意見が得られる場合も多いかと思います。(学生が忌憚のない意見を話せば)
- ・学生の声が聞けるのも貴重な機会である。
- ・学生の率直な意見が聴けて参考になった。
- ・学生さんがもっとふえてもよい。
- ・学生の身としてはおもしろかったです。先生方の涙ぐましい努力に感動しました。もっと早く聞いてたら、より大学での授業に身が入ったのかもしれない。笑

○(1)で「2)教員・職員・学生別にすべきである」と回答した人の回答

- ・職域や温度差で意見のポイントにズレがあるのでは。効率的な討議となりにくいのではないか？

○(1)で「3)その他」と回答した人の回答

- ・初年次教育や共通教育だけでなく、専門教育についてのFDも必要？((1)「3)その他」での括弧書き：学部は異なっても理系なら理系でまとめて欲しい；文化系の授業と本質的に異なる問題点や課題がある)
- ・回答なし((1)「3)その他」での括弧書き：学生がいなかったのではわからない。)

◎問4「今後、より多くの教員・職員・学生に全学FD研修に参加していただくために、
良い考えがあれば記入してください。」の回答

- ・参加することでポイントが付くとかベースu pするとか。参加者にメリットあればよいのでは？
- ・事前に討議のポイントを絞ってはどうか。例えば職名別に等で。FD研修についての前フリがあってはどうか？
- ・採用後〇〇年以内の教員は必須にする。
- ・もっとコンパクトにする（凝縮させる）。この時期（授業期間）に3時間も使うことは避けられても不思議ではない。
- ・雑用が減れば……
- ・大学人が自ら大学教育の目標再設定をはたすこと
- ・必要性を理解させる
- ・模範授業をやったらどうだろうか？悪いサンプル授業でもおもしろいと思う。（皆で指摘しあうと）；学生と教員との討議をやったらどうか？（危険？）
- ・FDを大学の教職員の職務として認識することが大事
- ・学生への周知に力を入れると、教員・職員・学生の比率が良くなると思う。
- ・ペナルティを課す（ぐらいいいことをしないと）しかないでしょう。
- ・学部のFD委員は強制参加させればよいのでは。この手の企画は参加してもらわなければ、価値はみとめてもらえない
- ・今回の内容であれば、教員志望の学生に周知したらよかったと思う。
- ・全学FDをあることを知らない教員がいましたので、もう少し宣伝しても良いのではないかな？と思いました。他キャンパスから参加するとき、バスがあり助かりました。
- ・知らない人がいると思う。（誰でも出ていい）＝（私は出なくていい）と考えてしまいがちになるので、告知の方法を検討したらよいと思う
- ・学部教員には参加者数のノルマを課すべき。せつかくの講演がもったいない。
- ・（1）教員・職員は最低年1回以上参加の義務付け。（都合により参加できない人はレポート提出）（2）アンケートの内容も工夫してください。
- ・各学部で講演のテーマに添ったFDをやるとよいのではないか；テーマ設定が耳ざわり
- ・生教食堂の割引券を配布する
- ・テーマを知らないなので、書けませんでした
- ・そもそも学生へはFDが何を意味するのかから説明する必要があるのでは
- ・過去5年間の授業評価の{高い 低い} 教員の公開授業や公演を企画してもらいたい。

◎欄外記述

- ・学生参加型授業の具体例について、じっくり話を聞きたいと思いました。本を買います。

杉谷・教養教官

- ・なお、小田先生、一人でがんばられたせいか、大学の一般大衆に対する蔑視不信のニュアスを感じたのがちょっと残念でした。あと「ハイ」の合いの手は耳ざわり

※問3「開催時期について、どう思いますか。」で「1）今のまま（10月下旬）でよい」と回答した人で、「(時期：)」の欄内に「水よう日以外」との記述あり

結びに代えて

本年度の「全学FD2014」を開催するにあたり、春先に全学FDタスクチームの中に設置した全学FD推進ワーキンググループで検討し始めた時、最初に確認したことは、各学部等で開催されているFDとの差別化を図るため、過去2年の全学FDの3つの特徴を継承することであった。具体的には次の3点である。

1. 討議型FD
2. 全構成員型FD
3. 楽しむFD

参加者の多くが自分の疑問や考えを率直に意見交換するグループ討議を研修の中核に据え、事務職員や学生も参加者として加わる大学構成員全体でのイベントとして展開し、しかも、できるだけ楽しく明るい雰囲気で開催しようというこの狙いはワーキンググループでもその後のタスクチーム会議でも大筋で了解され、基本的に前年度に倣った内容構成として企画内容を詰め、準備を進めてきた。

基調講演は地方国立大学としてはFD関係で目立った存在の一つの山形大学で、長年、FDをリードされてきた小田隆治先生にお願いした。グループ討議にも参加してもらい、楽しさとの関連で多少の失礼があっても問題にならないという条件があるので人選はある程度限られたが、「北の情熱改革人」という多少くだけた枕詞も小田先生は笑顔で了承されるなどスムーズに事は運んだし、全体としてはほぼ構想通りのものができたのではないかと考えている。

但し、問題となるのはやはり参加者の少なさであろう。当初、少し大風呂敷を広げ、参加目標200名ということを公言したが、実際の参加者は3ケタに届かなかった。本年度は早い段階から実施日を各学部アナウンスするなど広報に努め、ワーキンググループの西谷教授を通じての依頼を受ける形で野上睦美助教にインパクトのあるポスターも作成して頂いたが残念がら十分な効果を上げることはできなかった。両氏には深く御礼申し上げるとともに、非力をお詫びする次第である。

「全学FD2015」も間もなく準備を始めねばと考えているが、既にいくつかのアイデアも寄せられており、自然に多くの参加者を呼び込めるような充実した内容にできるよう今後、鋭意努力したい。

最後に、学務課の横山、塩沢両氏には、参加者としてだけでなく、裏方スタッフとして大変お世話になった。また、二人を軸としつつも、事務職員の多くの方にもお世話になった。大過なく開催できたことはそうした方々の御尽力の賜物とも考えている。心より感謝したい。

企画責任者（FD部門長）
大学教育支援センター
橋 本 勝

全学FD2014
“北の情熱改革人”小田隆治と語ろう
報告書

発行／2015年2月

編集・発行／富山大学大学教育支援センター 富山市五福3190番地